

「美女と野獣」考 —その2—

新倉朗子*

On Beauty and the Beast Akiko Niikura

〔内容抄録〕 「美女と野獣」を昔話との関係において考える。民俗学における昔話研究の成果をできるだけ参照しつつ、トンプソンやドラリュのタイプ索引を使用して、「美女と野獣」が昔話の体系の中でどのように位置づけられるか、また昔話の基本構造との関係はどのようなものであるかについて、少し大きな枠組「行方知れずの夫を探ねて」の中で類話を読み、そこから浮び上る主要テーマ、特に獣を中心にその象徴的意味について若干の考察を試みるものである。

「美女と野獣」について I. and P. オーピーは、「シンデレラについて最も象徴的なフェアリー・テールであり、最も知的満足を与える、世界的広がりをもつ異類婚姻譚の最良の例」と書いている³⁾。

全世界にわたり広く知られているこの話は、いうまでもなく口承の昔話に由来している。「昔話」は、*folktale*, *conte populaire*, *Volksmärchen* 等に相当する用語として、現在では民間説話、民話等に代って民俗学界で用いられている⁴⁾ので、本稿でもできるだけこの用語を当てることにする。昔話の学問研究をすすめるには、世界各地で採録された話について、植物学が万国共通の分類法によってなしとげた分類に匹敵するような、科学的分類目録の作成が不可欠となる。『シンデレラ』の東洋における姉妹『鉢かづき』の例を挙げるまでもなく、異なる民族間にみられる昔話の不思議な類似性はしばしば私達を驚かせ、人類文化の根源への興味をかきたてる。ステイス・トンプソンは、昔話の「研究者が特定の地域の民俗の重要性を過大視し、ごくわずかの人間の特別な表現の習慣を

根拠に、包括的な理論をつくりあげたりするような偏狭な地方根性を避けることができるのは、自分の研究対象が、本質的に世界的な視野を前提とするという認識に達し得た時のみなのである。」⁵⁾ といい、包括的な分類について知る必要を説いている。昔話研究における分類目録の作成は、出発点であると同時に一つの到達点でもあるといわれるが、その輝かしい到達点の一つが、アンチ・アアルネにより始められ、トンプソンの改定を経て、2人の名を冠して呼ばれるタイプインデックスである⁶⁾。この指標的な国際分類のあと、各国別の分類目録がつつぎに作成されている。日本については関敬吾氏の名著『日本昔話集成』全6巻および「日本＝アジア地域の昔話の平行関係」（未定稿）の目録を含む『日本の昔話』がある⁵⁾。本稿ではフランス及びフランス語圏諸国を対象とし、ポール・ドラリュ、及び彼の死後衣鉢を継いだマリ・ルイーゼ・トゥネーズの2人の手に成る『フランス昔話目録』第2巻⁶⁾を主として参照した。これは現在3巻まで出ており、既に1600頁にのぼる膨大な目録であるが、更にあと2巻の刊行が

*フランス語研究室

予定されている。分類の基本的考えはトンブソンの国際分類にもとづいており、番号もタイトルも（タイトルについては可能な限り）踏襲している。各タイプの昔話について代表的な例を未刊筆稿や、入手し難い昔話集から選んで掲載しているのが特徴で、この点『日本昔話集成』に似て民俗学の門外漢でも楽しみながら利用できる目録となっている。

アモールとプシケーの物語 『シンデレラ』が『ろばの皮』と共に「灰かぶりサークル」に入るように、すこし大きな分類によれば、『美女と野獣』は「アモールとプシケー型」に含まれる。スヴァーンはこの型のモノ グラ フ ィ 研究⁷⁾で、全世界から1100の類話を収集し分類しているというし、『フランス昔話目録』の中でも、このタイプは一番多くの分布を持ち、フランス国内だけで122話が登録されている。

文献に残された最古のものは、よく知られるように紀元2世紀ラテンの作家アプレィウスの『変身譚』（別名黄金のろば）に挿入された『クピドーとプシケーの物語』であるが、この物語もギリシャに伝わる昔話をもとになっているといわれる。

「むかし或る国に王様とお妃とがおいでになって……」⁸⁾と老婆が語り出す、昔話の形式をふまえたプシケーの物語をまとめてみるとうりである。

3人の姫の中で一番若く美しいプシケーは、美の神ヴェヌスの嫉妬をあおる。ヴェヌスは息子のクピドをさし向け、プシケーが最も卑しい人間と恋におちいるようにせよと命ずる。クピドは母を裏切り、昼は魔物の姿になると思わせて姿を消し、夜だけプシケーを訪れる。しかし、プシケーは姉達にそそのかされて、禁を犯し夫の姿を見たため、怒ったクピドは飛び去ってしまう。長い困難な試練を通り抜けたあとで、ようやく彼女は夫と再会することができる。

『昔話論』⁹⁾の中でユエは、この物語の前半は「美女と野獣」に相当するが、後半は「若い

娘と魔女」のテーマであることを指摘している。「美女と野獣」に共通するモチーフは次の通りである。

美しい娘が動物の妻にさせられる—多くの話でその動物は蛇である—夫は夜人間の姿になる—若い妻は宮殿で何一つ不自由な生活を送るが—夫の姿を見ようとしてはならない—この禁を犯した時すべては崩れさり—夫は消え—試練のあとでなければ夫に再会できない。

「若い娘と魔女」というのは、魔女の権力下におかれた娘がさまざまな難題を課されるが、魔女の息子が援助者となって娘を助けるという話で、難題の一つに、別の魔女に娘を送って殺させようとするのがある。プシケーがヴェヌスによって冥王の妃プロセルピナのもとへ送られるところと共通している。またこの話の結末には、ヒロインが燃える松明を持たされるモチーフが入っている。

『ATタイプインデックス』によると、「アモールとプシケー型」は425型と428型に分類される。428型は「狼」というタイトルを持ち、魔女に仕える娘が不可能な難題をつぎつぎに課せられ、しかも別の魔女にこの娘を殺せと指示した手紙¹⁰⁾を運ぶ試練までである。狼が援助者となり娘を逃がし、魔法がとけて狼は王子となって娘と結婚するという話である。前記ユエの「若い娘と魔女」はこの型に入る。

425型は「行方知れずの夫を探ねて」というタイトルを持ち、14のサブタイプに分かれている。全体に共通するエピソードは、I異類婚、II変身の魔法がとける、III夫が消える、IV夫を探ねる、V夫と再会、でそれぞれモチーフによって細かに分かれるが、サブタイプC「美女と野獣」では、IV夫を探ねるエピソードの欠落が特徴である。スヴァーンによれば、「425A型はこの話の最古の形を持ち、≪直接、或いは間接に他のすべてのサブタイプがそこへ溯ることのできる唯一の型≫¹¹⁾であるといい、このタイプの昔話がすべてアプレィウスの『変身譚』によるという先行の研究を批判し、『変身譚』の

「プシケー物語」も425A型の文芸化された一つに他ならず、口承では不可欠の、燃える松明のモチーフの欠落を指摘している。また『ATタイプインデックス』による428型は425Aに含み得るとして独立番号をつけていない。¹²⁾

異類掣の昔話の代表的タイプともいい得る、この425A型を文献伝承の例にみると、バジールの『ペンタメローネ』の^{フレイム・ストーリー}枠話や、第5日第4話の『金の根っこ』、グリム童話集の『鉄のストーブ』、オーノワ夫人の『グラシウズとベルシネ』、『緑の蛇』などがある。

『ペンタメローネ』¹³⁾では枠話が先づこのタイプの特徴モチーフを持っている。

老女を嘲笑したため呪いをかけられた王女は、魔法にかけられて墓に埋められた王子を探し、生き返らせて夫としなければならない。彼女は親切的な妖精の贈物である胡桃と栗と榛の実を持って出かけるが、居眠りをしたため黒人の女奴隷に、もう少しのところまで涙をためた桶を横取りされる。3つの贈物を使って王妃になった女の気をひき、話をききたい気分させる。5日間にわたり女たちが10話ずつ話をさせられるが、最後に王女が話手となり、王妃の悪だくみを暴いてめでたく王子と結ばれる。

話数の多いことからみても世界の昔話の中で重要な位置を占めるこの425型は、何故か日本の昔話にみるのが少ない。その理由を考えてみるのも興味深い研究テーマであろう。関氏は「わが伝承でこれと一致するものは少ない」¹⁴⁾とされ、『お伽草子』の『天稚彦物語』がこれに近い例と指摘しておられる。日本の蛇掣、猿掣、馬掣等の昔話には、本来動物であるものが人間の姿をして娘と結婚し、娘は親の助言等により動物の夫を殺して難を逃れるというテーマが共通している。「アモールとプシケー型」と呼ばれる西欧の美女と野獣譚とは本質的に異なっているが、結婚によって動物から人間に変身するというモチーフに限れば、ややタイプを異にする『田螺息子』の話にこれを見ることが出来る。

これに比べ、隣りの韓国には425型の特徴をほぼ備えた『青大将掣』の話¹⁵⁾が伝わっている。

昔話の基本要素 昔話には一定の構造があり、その構造を理解することが大事であるが、トンブソンやドラリュの分類における考え方は次の三段構造をとっている。いわゆる複合形式を持つ本格昔話の場合、一つの昔話はいくつかの挿話で構成され、その挿話は一つまたは複数のモチーフ群から成り立っている。従ってこのモチーフが昔話を構成する基本要素となるのである。425型は複合昔話の中でも特に複雑なので、類話を読む前に『フランス昔話目録』をもとに、本稿で言及する425型の基本モチーフを表にしてみよう。¹⁶⁾

I 導入モチーフ群

1 異類掣が魔法にかけられた原因となる話。
悪い妖精の結婚申込を断ったため。

7 彼は泉か井戸に住む。

8 結婚の約束と交換に娘の父を治す約束。

11 町へ行く父親が娘達に土産の希望をきく。

a 末娘は1本のバラ、または

b 非常に変わったものを頼む

28 父は帰宅後最初に出会うもの(=娘)を約束する。

II 超自然の夫(異類掣)

1 熊 2 犬 3 蛇 5 狼 6 野獣または怪物

III 結婚 5 親元へ帰る許可

IV 禁忌にふれる

1 明りのもとで夫を見てはならぬ。(ヒロインは禁を破りランプの油を夫にかける)

3 夫の動物の皮を燃してはならぬ

4 期限を過ぎて親元に留まってはいけない

V 夫を探す遍歴

1 次の条件を満たすまで夫に再会できない

a 何足かの(鉄の)靴をすりへらすまで

b 涙で桶を一杯にするまで

2 別れる際夫から品物を受けとる

4 遍歴の途中ヒロインは

a ガラスの山を越えねばならない

b 湖または川を越えねばならない

6 夫のいる場所への道を尋ねる

a 老婆に b 太陽・月・星・風などに

d さまざまな動物の主人格のものに g 妖精に

7 ヒロインは変装して出かける

Ⅶ再会（モチーフによりサブタイプに分類）

サブタイプA（425A）

3 難題

b 大量の穀物を選び分ける

c 大量の羽を集めさせられる

j 掃除などさまざまな家事をこなす

1 難題を非常に短い時間にさせられる

4 夫の援助がある

5 別の悪い妖精へ使いにやらされる

6 そこで、a 宝石を探しに行く b 箱を探しに行く d 殺せという依頼の手紙を渡す

7 途中出会う人間や動物に対し、帰途殺されぬよう定まったやり方で遇すること

a 職人には欠けている道具を与える

c 動物には餌をやる

j ドアには油をさす、又は閉める

9 帰途悪い妖精から持ち帰った箱をあける

a 楽師や楽器がとび出して演奏はじめる

10 夫と魔女（又はその娘）との結婚式で蠟燭又は松明をもたされる

b 松明を持つ者に魔法がかけられる

c 夫が持ち手を入れかえヒロインを救う

サブタイプB（425B）

1 遍歴の途中援助者（V 6）から3つのすてきな贈物を貰う

c すばらしい服を d 太陽と月と星の色のドレスを e 金の鶏とひよこを g 上記の品の入った3つの胡桃、3つの卵を

2 この宝物で3晩夫と同室する権利を買う

新しい婚約者（魔女）に夫は眠薬を飲まされるが3晩目に自分の妻と再会する

サブタイプC（425C）

1 親元から帰り死にかけている夫を発見する。

2 次の方法で甦らせ魔法をとく

c 生き返るなら結婚すると約束する

Ⅶ結尾のモチーフ

7 悪い妖精から逃げる

8 意地悪な姉達は石像になる

類話およびその基本形式 この表を使いながら、比較的形の整った代表例となっている口承の話、フランスのアリエージュ地方に伝わる『クールバッセ』（小さな鴉）¹⁷⁾を読んでみよう。

昔、3人の娘を持つ盲目の父がいた。或る日、上の娘が泉に（I 7）水を汲みに行くときと一羽の鴉（II）に出会った。鴉は父親の視力を回復させたいなら自分と結婚せよ、という（I 8）。末娘が父親のため鴉との結婚を承諾する。夜、鴉は王子に変身する。家に戻った（III 5）末娘から話を聞いた姉達は嫉妬に狂い、宮殿に忍び込んで鴉の羽に蠟燭の熱い蠟を流す（IV 3）。王子と娘は離ればなれに遠くへ行って苦業に耐えることになるが、別れぎわに王子は娘に、「小さな鴉、小さな鴉、どうぞ私を助けておくれ」という呪文を教え、7個のパン、大きな箒7本、小さな箒7本、針7本、油の壘7本を持って行くようにいう（V 2）。2日間娘は宮殿に残り、1日目は50台の荷車に堆肥を積み（VI A 3 1）、次の日は積んだ堆肥を全部撤く難題を課されるが、呪文で鴉たちの援助（VI A 4）を得、解決する。娘はダイヤモンドを探しに出発する（VI A 5、6 a）。途中1片のパンをめぐって7年間も争っている7匹の犬に出会いパンを与え（VI A 7 c）、1本の箒をめぐって7年間も争っている7人の女達に箒を与え、1本の針をめぐって7年間も争っている7人の仕立屋に針を与え（VI A 7 a）大きな階段に着く。7年間も掃除されなかった階段を掃き、7年間も油をさされなかった扉に油をさし（VI A 7 j）、それを7回くり返してから、王子の祖母の寝ている部屋に入る。ダイヤモンドを持って部屋を出ようとするとき、眼をさました王子の祖母が、

「扉よ扉よ、あの女を止めておくれ」と叫ぶが、7年間の苦勞から解放してくれた娘を、誰もつかまえようとはしない。王子の城に帰りついた娘は夫選びのテストを受ける。かねて教わった通りに一番ボロの服を着た男を選び、めでたく王子と結婚する。「私は牧場を通った。トラック、トラック、私の話はこれでおしまい。」で、この話は結ばれる。

この話にも VI A 10 松明のモチーフが欠けているが、そもそもこのタイプはフランスに8話しか伝えられておらず、『クールバッセ』も同一の語り手から2度にわたって採録し完全な形に組み立てた、とドラリュは断わっている。

『金の根っこ』(*Il ceppo d'oro*) は7人の糸紡ぎ女に出合う難題等、後半の遍歴、再会エピソードにおいてこの話と共通モチーフを持っている。[V 1 a, 6g VI A 1 悪い妖精の家へ行く, 3 b, c, 4, 5, 6 b, d, 7 c, d, 9 a, 10 b]

フランスの昔話モチーフ索引を使ってバジレヤグリムを読むのは適当でないかもしれないが、比較のため前記の表に当てはめてグリムの『鉄のストーブ』を読んでみると次の通りである。I 魔法にかかった男が娘に結婚を申し込む。II 鉄のストーブ, III 5, IV 3 語以上口をきいてはならぬ, V 4 a, b, VI B 援助者のばあさん墓 V 6 d から, 1 g と 3 本の針と車製の車の輪を一つ貰う, VI B 2。

世界的にも、フランスの場合(54話)でも、一番類話の分布が多く、国際分類のタイトル「行方知れずの夫を探ねて」に最も合致しているのが425B型で、特徴はヒロインが遍歴の途中援助者から魔法の品を貰い、それで夫の再婚した相手から、3晩夫と同室する権利を買いとるモチーフであるとドラリュは解説している¹⁸⁾。

『ペンタメローネ』第5日第3話『ピント・スマルト』(*Pinto Smalto*)にもサブタイプBの特徴がある。I 11 b 砂糖, アーモンド, 香水, 麝香, 琥珀, 真珠, ルビー, サファイア, 金の糸, こね鉢, 銀のこて等を土産に頼み, II アーモンドと砂糖をこねてペーストを作り、またと

ない美青年を作り上げ、生命を吹き込む。結婚式に訪れた女王がこの美しい夫ピント・スマルトを連れ去る。III 結婚 IV 禁忌なし。V 6 g, 7 VIB 1 3つの呪文, 2。

次に重要なサブタイプCが『美女と野獣』である。ヨーロッパ中に拡がりを持つ美女と野獣譚は、ポーモン夫人の筆による物語から派生したものが多く、その伝播には16世紀から始まり、19世紀中頃に流行をみた、行商人の手で売られる〈青い叢書〉¹⁹⁾が大いに貢献したらしい。ポーモン夫人の作品が先行のヴィルヌーヴ夫人の長い物語を縮めたものであることは前に述べた²⁰⁾が、この作品もオーノワ夫人の『羊』²¹⁾に多くのエレメントを借りているといわれる。

『羊』のあらすじは次の通りでてる。

むかし3人の娘を持つ王がいた。戦いから帰った王は、娘達に前夜みた夢を語らせる。一番愛していた末娘メルヴェイユーズのみた夢は、2番目の姉の結婚式に、王が金の水差しをさし出して、手を洗う手伝いをするという夢だった。威厳を傷つけられ怒った王は、末娘を森へ連れて行き殺せと家来に命ずる。彼女はそこで金の角を生やし花輪を首にかけた白い羊に会う。地下の宮殿に案内された王女は、何一つ不自由ない暮らしを保証される。羊から魔法にかかって変身した由来をきく。2度目に姉の結婚式のため帰った時、扉が全部しまっていて羊の宮殿に戻れない。約束の期限がきて羊は迎えに行くが、門番に追われ、悲しみのあまり身を投げて死ぬ。

この物語には夢のモチーフもあり、王子が羊のまま死んで変身が行なわれず完形譚とはなっていない。花輪をつけた白い羊は、異類婚として優しすぎて野獣の持つべき象徴性が弱く、美女と野獣譚の中でも特異な存在であり、これを劣った話²²⁾とする学者もある。しかし『羊』でおもしろいのは、宮殿が地下にあることで、この点『プシケー』に一番近く、「異類婚姻の昔話にとっては、他界のありかが、いつも大きな問題となる」²³⁾という『七夕』についての大島氏の指摘もあり、『鼠の草子』の地底の浄土

などとも関連して考えてみるべきテーマである。この他、『金の根っこ』においても、ヒロインが根っこを掘って地下の宮殿に降り、雷と稲妻の精が変身している黒人奴隷に出合うモチーフがある。また異類掣の仲間に登録されていないが、ペローの、人間の形を持つとは思えぬほど醜い猿のような男『巻き毛のリケ』も、その宮殿を地下に持っている。更に、ペローより一年前に書かれたベルナル嬢の『リケ』は、もっとはっきり怪物に似た異形で、地下王国の精グノーム(gnomme)である。

オーノワ夫人の『羊』は前述の基本形式によれば、I 夢のため森へ追放, II 羊, I 1, III 5 IV 4 となる。ヴィルヌーヴ夫人の『美女と野獣』は、I 11 a, II 6, III 5, IV 4 VIC-1 cf. 2c, I₁。ポーモン夫人のそれは、I 11 a, II 6, III 5, IV 4, VIC-1, 2c, VII 8 である。『フランス昔話目録』では完全譚が26話、サブタイプBとの混合4話、その他7話で、『美女と野獣』の題を持つものが一番多く、ついで『バラ』であるが、変わったものでは『馬の頭』、『7つの頭をもつ野獣』、『娘とロバ』、『蛇とバラ』、『末娘』^{バンジヤイース}などがある。これら口承の昔話に圧倒的に多くみられるモチーフの構成は I 11 a, II 6, III 5, IV 4, VIC-1, 2c であり、いづれもV夫を探す遍歴エピソードが欠落している。

『ATタイプインデックス』では美女と野獣譚(425C)に入っているグリムの『なきながらびょんびょん跳ぶひばり』はモチーフに分けて読んでみると次のようである。I 11 b II ライオン I 28, III 5, IV 光に当って夫は鳩になる V 6b, VI B 1 d, e, g, 2 (2晩) VII 7。『美女と野獣』に欠落していることが特徴のV遍歴エピソードがあり、VI再会においてもサブタイプBの特徴がみられる。

獣のテーマ 『美女と野獣』の物語が遠いギリシャの昔から人々の関心をとらえてきたのは、この物語のもつ象徴が時やとを隔てても変わらず人間性に深く根ざしているためであろう。

長い年月の間、人々に愛され育てられて語り継がれてきた、数多くの昔話に共通するモチーフを拾って行くと、いくつかのテーマが研究課題として浮かび上がってくる。それらのテーマを考察することにより、国や民族による特色がわかってくるし、文芸化された各作品の特徴や作家による力点のおき方や解釈の違いも明らかになるのではないかと思う。共通のテーマとしては、父親、バラ、獣、獣の出現する場所、獣の住む宮殿、末娘、遍歴や難題解決(その欠落も含めて)等がある。ここでは「獣」のテーマを中心に考えてみよう。

フランスの昔話に登場する異類掣は、『美女と野獣』に限ってみると、II 6「野獣」又は「怪物」のモチーフが圧倒的に多い。その外観は説明されないのが普通であるから、野獣(Bête)という語によって人々がどのようなイメージを思い浮かべるのかは想像するしかないが、版を重ねたポーモン夫人の作品に附された挿絵が一つの手がかりになるであろう。いま手許にある、大部分が19世紀の画家による、20枚ほどの挿絵を比べてみると、大体2通りに分けられる。1) 服を着ていない獣と、2) 顔や手足は獣だが人間と同じような服を着たものであり、後者の代表はクレインの描いた、猪に似た頭を持ち、貴族風の衣裳をつけ、モノクルまでした獣である。『千一夜物語』の挿絵で知られるデュラックの描いているのは狼男で、服装はターバンを巻いたオリエント風である。4つ足は少く、裸の獣も多く2本足で立っている。頭はコクトーが映像化した獅子に似たものや、馬、猪、猿、狼などに似ているのが多い。獣は想像上の産物なのだから、実在の動物と一致しない方がよいわけで、古来人間が考え出してきた一角獣とか、^{ケンタウロス}半人半馬とか^{ルーガル}人狼とかの仲間の一つであり、現代ではさしづめキングコングに当たるような存在なのである。獣の中で最も象徴的なのは『ブンケ』の場合で、結婚した後も夫の姿は見えず、「婿として人間の胤から出た者をでなく、荒く猛しく娘のように悪い男を待ち設けるがよ

い」という神の託宣による怖れが存在し、姉達の「お前の夫は大蛇だ」という暗示が存在するのみである。

獣のもつ意味を心理学や精神分析から説明しようとする試みが数多く見られるが、最近のものに、ベッテルハイムの『妖精物語の精神分析』²⁴⁾がある。彼の説を参照しながら、以下精神分析の見方による解釈に簡単に触れてみよう。父親が野獣のバラをとる行為が事の発端となる運命的な事件であるだけに、そこに象徴的意味を読みとろうとする解釈が多い。その一例は、野獣にとって世の中で何より大事なバラは即ち男らしさの象徴だとする解釈であり、バラをとられた時、宮殿の主人（即ち父）として侵入者に対していた立場が逆転し、相手の娘に結婚を申し込む婿（息子）の立場になる、というものである²⁵⁾。しかしながら、一般に花を折る行為は、それが花の代表のバラである場合は尚のこと、少女期の終りを予知させるという受けとり方が普通であろう。バラは父親に負担をかけまいとする娘の愛情から出た頼みであり、父親も娘への愛からバラを盗むのであり、その行為の底には2人の愛情があるのだが、行為そのものは野蛮な、獣的な行為なのである。フランスのクルーズに伝わる話では、「バラを切る時、血が流れました」という個所がある。娘が獣のところへ赴くのは父親への服従と愛からであり、父親は娘と獣を引き合わせる役割を果す。どの話も重要なのは父親であって、母親の存在は稀薄である。子供は無意識に「性」とか「恋愛」の持つ危険なコノテーションを感じとり、それをタブーとして受けとっており、成長しても性はおそろしいものではないという真理と簡単には和解できない。それ故夢やファンタジーの中では性が怪物に象徴されるのである。どうしても結婚しながらぬ娘を持って、非常に不幸な父親がいた、という書き出しで始まる『ピント・スマルト』は、だからこの裏返しであり、性=怪物のおそろしさを拒否するベッタ（ヒロイン）は、女の子の大好きなアーモンドと砂糖をこね、

宝石で目鼻をつけ、金糸で髪をつけて自分の手で夢のような美青年を作り上げてしまうのである。

典型的な美女と野獣譚においては前述の通り、行方知れずの夫を求めてヒロインが遍歴し試練を受けるモチーフがなく、話の短いのが特徴である。困難な試練を経て愛を確める経過がないのだから、獣の愛を受け入れるまでの心理的葛藤がクライマックスになるわけだが、昔話には勿論主人公の心理描写などない。この点に関しては『巻き毛のリケ』は非常に示唆に富んでいる。リケは怪物に近いほどおそろしく醜いが、もともと人間であって真の変身は生じない。ただ王女が願いをかけると忽ち彼女の眼に世界一の美青年と映るのである。「人の愛するものすべて美わし」というモラリテをペローは附している。

「どんな子供も一度は夢みるような、たちどころに願いのかなう宮殿の生活を提供する、優しい保護者（父親）的存在である間は、野獣はその姿を保っていなくてはならない。何一つ不自由ない暮らしにありながら、空しさが心を占めて行き、ヒロインは獣の訪問を待ち遠しく思う。実の父に代わる保護者としての獣の立場が少しずつ変化して行くのである。ヒロインがオディプスコンプレックスから順調に脱却して、自分の年令にふさわしい異性として相手を意識し始める時、獣のおそろしい外観はのり越えることが可能となる。その時性は思わしいものではなく美しいものとして体験される。性は初め動物的外観の下に姿を現わすが、男と女の愛はあらゆる感情の中で最も美しく、永遠の幸福を約束する唯一のものであることをこの物語は教えてくれる。子供にオディプスコンプレックスの本質を理解させ、それを克服する希望を持たせることのできるすぐれた愛の教育の物語である。」というのが大体においてベッテルハイムの結論ではないかと思う。『美女と野獣』の含まれる『アモールとプシケーの物語』は、言いかえれば「愛とこころの物語」なのである。

昔話にもとづく物語は、人間性の根源の問題に触れる場合が多いので、深層心理学や精神分析に光を当てられて解明される部分もたしかに大きいといえる。しかし、ビュートルがいうように、「昔話の象徴性は表現上の必然から生じるものであって、聴き手又は読み手にわかり易い言葉を使うことと、性の領域に対する禁句という配慮から、性的意味を持っていること自体神秘の雲に覆われている」⁹⁶⁾ことが多い。精神分析による解釈はあくまで一つの解釈であって、それがすべてでないことはいうまでもない。たとえば、ヴェルコールの『海の沈黙』の中で、占領軍のドイツ士官が宿舎のフランスの娘に向かって *Das Tier und die Shöne* を物語る場面に私達は野獣に象徴されるナチスと、美しい国フランスのイメージを重ね合わせるものであり、そうした読み方も可能にするのが、昔話のもつ象徴性だと思うのである。

〔註〕

- 1) Iona and Peter Opie, *The classic fairy tales*, Oxford University Press 1974 p. 137
- 2) 関敬吾『日本の昔話—比較研究序説』日本放送出版協会 1976 p. 63-p. 7
- 3) Stith Thompson, *The Folktale* 邦訳『民間説話理論と展開』荒木博之・石原綏代訳 社会思想社 1977 引用は下巻 p. 212
- 4) Antti Aarne and Stith Thompson, *The types of the Folktale*, Helsinki 1964『A T タイプインデックス』
- 5) 関敬吾『日本昔話集成』角川書店 昭25~33
- 6) Paul Delarue et Marie-Louise Tenèze, *Le conte populaire français*, Maisonneuve et Larose Tome 2ème, 1964『フランス昔話目録』
- 7) Jan-Ojvind Swahn, *The Tale of Cupid and Psyche* (Aarne-Thompson, 425 & 428), Lund 1955 残念ながらまだ見ることができない。『フランス昔話目録』が全面的にこの研究に依拠しており、その詳しい解説によった。
- 8) 『黄金のろば』呉茂一訳 岩波文庫
- 9) Gédéon Huet, *Les contes populaires*, Flammarion 1923 p. 91-96
- 10) 「ウリアの手紙」のモチーフは日本の『沼神の手紙』にもみられる。関前掲『日本の昔話』p. 32 「昔話比較対照表」
- 11) Cité d'après Delarue, op. cit., p. 107
- 12) Delarue-Tenèze op. cit., p. 107 et 108 cf. Aarne-Thompson op. cit., p. 145〔註〕
- 13) *The Pentamerone of Giambattista Basile, translated from the Italian of Benedetto Croce, edited by N. M. Penzer*, John Lane the Bodley Head 1932
- 14) 関『日本の昔話』p. 318
- 15) 崔仁鶴編『朝鮮昔話百選』日本放送出版協会 昭49及び崔仁鶴『韓国昔話の研究—その理論とタイプインデックス』弘文堂 昭51
- 16) モチーフ番号は、スヴァーンの表からフランスに関係のあるものをドラリュが選び出しているので欠番が生じている。
- 17) Delarue-Tenèze op. cit., p. 72-77 分布番号92
- 18) Delarue-Tenèze op. cit., p. 108 トンプソンはこのモチーフを425Aに含めているので、『A T タイプインデックス』は『鉄のストーブ』が425Aに分類されているのである。
- 19) 24~28頁位の小型の薄い本で、粗悪な水色の紙に印刷されていることが多いので、Bibliothèque Bleue と呼ばれた。
- 20) 拙稿「美女と野獣」考—その1—東京家政大学研究紀要第17号
- 21) M^{me}d'Aulnoy, *Le mouton*, in *Contes de fées*, Mercure de France 1956
- 22) Jacques Barchilon, *Beauty and the Beast, From myth to fairy tale*, Psychoanalysis and the Psychoanalytic Review, 1960 winter vol. 46 no. 4
- 23) 大島建彦『お伽草子と民間文芸』岩崎美術社 1975 p. 38
- 24) Bruno Bettelheim, *The Uses of Enchantment* 使用したのは仏訳 *Psychanalyse des contes de fées*, Robert Laffont, 1976
- 25) Barchilon 前掲論文
- 26) Michel Butor, *La balance des fées* in, *Répertoire*, Les Editions de Minuit 1960 cf. p. 68

(1977年9月)